

皇位継承、「長子相続」で

上田 篤

朝日新聞 06(H18).3.3



うえだ・あつし 1930年生まれ。
建築学者。NPO法人「社叢学会」副理事長。
主な著書に「日本人の心と建築の歴史」など。

「男系」「女系」を巡って論議を呼んだ皇位継承問題も、秋篠宮妃紀子さまのご懐妊により結論は先送りになった。しかし問題が解決したわけではない。とりわけ今回は皇統断絶の怖れに端を発した論議だったが、より根本的なことは、「日本文化」における天皇制の問題だ。

「天皇制」は、律令国家の開始に伴って「天智」「天武」あるいは「持統」のころに成立したと思われる。今から1300年ほど前の話だ。ところがそれ以前に「前天皇制」とでもいうべきわが国独特の家体制があった。

歴史学者はそれを「ヒメ・ヒコ制」などという。「日女」と「日子」という、太陽の霊力を持った女王であるシャーマン・キングと大王による「共同統治」だ。中国の史書『魏志倭人伝』はそれを「卑弥呼と男弟」などと記す。

その場合「共同統治」の中心は一般にシャーマン・キングすなわち巫女王にあった。天皇のことを古くはスメラミコトと呼んだが、国文学者の折口信夫はそれを「高貴なるミコトモチ」すなわち「巫女王」と見る。これに対し大王は、元来「巫女王

の補佐」あるいは「防衛隊長」だったろう。古代日本の戦争の多くが「人民の信望のあつた巫女王の取りあい」だったと思われるからだ。人民の手によって大和の善墓に葬られたヤマトトビモソヒメのおいの崇神大王もそういう性格を持つ。ちなみに、「ヒメ・ヒコ制」以前の平和な時代は、巫女が一人でマツリゴトすなわち天地自然の安寧を祈る祭祀を行い、それが日本の国の政

国で生きていくためには自然を予見することが必須の条件だったのだ。巫女はそのような自然の変化を読みとることができる能力を持った優れた女性である。「幸福論」を書いたフランスの哲学者アランは「シュビラ、すなわちヨーロッパの巫女はたえずおどおどしている受け身の女だった」という。だからこそ、巫女王としての推古8年(西暦600年)に隋の文帝が

マツリゴトの中心にかつては女性の存在

治だった。神話の女性神・アマテラスなどはその例といつていい。その場合アマテラスの子のオホホミミは「女系」で、弥生から縄文に遡る古い時代は「女系」が支配的だったことを示すものだろう。

日本は自然の変化の特別激しい国である。それは昔から変わりはない。だから人々は海での漁も、里での稲の刈り入れも、自然の変化を説くで行わなければならなかった。そうでなければ生死にかかわる。この

の「四方拝の行事」などとして今日も数多く執り行われている。こういう巫女、さらには「ヒメ・ヒコ制」の流れをくむ天皇制は、自然現象に関心を集中するこの国の伝統・儀式・文化を保持するだけでなく、さらに天皇は多く「政治の中心にあつて執政せず」という立場をとり、独裁者を排除する機能を持った。今日の「象徴天皇制」もそのような伝統を受け継いでいる。現在の政治形態も、形を変えた「ヒメ・ヒコ制」と見ることが出来る。

このような「日本文化」の視点から見ると、本来のスメラミコトは、自然の変化を予見する超能力を持った女性にあった。ただ今日、「女性天皇」に超能力を期待することも、超能力を持った女性を探し出すことも難しいから、そういう伝統を持った天皇家の男女を問わない「長子相続」で天皇が選ばれて、無用な思惑や混乱を避け、皇統を維持し、自然の祈願、日本文化の保持、民主性の堅持などのマツリゴトを行えばいいのではないか。この国の長い歴史を顧みれば、マツリゴトの中心に女性があることは少しもおかしくないの